

# ハンガリーの体制転換と国際環境

論

萩 野 晃

説

## はじめに

1985年3月にソ連共産党書記長に就任したゴルバチョフ（Mikhail S. Gorbachev）がペレストロイカや新思考外交を打ち出すと、その影響はまもなくハンガリーにも及ぶことになった。1956年以来、ハンガリーは社会主義労働者党書記長カーダール（Kádár János）の統治下にあった。1980年代後半のハンガリーでは、高齢のため深刻化する経済危機に対処できないカーダールの書記長辞任と変革へ向けた動きが始まった。

ゴルバチョフ登場後のソ連の東欧政策の変化がハンガリーに及ぼした影響に関して、国内情勢と国際環境の二つの側面から捉えるべきである。前者に関して、先行研究では、ゴルバチョフが東欧の内政に干渉しなくなった結果、ハンガリーでは改革派が台頭して1988年のカーダール退陣から1989年の体制転換への流れが形成されたと論じられる<sup>(1)</sup>。しかしながら、ゴルバチョフのハンガリーへの不干渉姿勢には、一貫性があったのかどうか再考すべきだと筆者は考える。実際、ゴルバチョフが社会主義労働者党指導部の刷新に果たした役割も指摘されている<sup>(2)</sup>。後者に関して、ゴルバチョフのペレストロイカや新思考外交に反発する東欧諸国での内政の硬直化が、まもなくハンガリーにとって隣国ルーマニアからのハンガリー系少数民族の流入となってあらわれた。さらに、ソ連の東欧政策に生じた変化がもたらした最も重要な出来事ともいべき体制転換当時のオーストリア国境で

の鉄条網撤去が、自国の国内政治に失望して西ドイツへの亡命を意図した東ドイツ市民をハンガリーへ向かわせる事態につながった。1988年から1989年にかけてのルーマニア、東ドイツとの関係の先行研究<sup>(3)</sup>の成果を踏まえつつ、国際環境と国内情勢の動きに相関関係がなかったのか、あらためて検証すべきではないか。

本稿の目的は、ハンガリーをとりまく国際環境の変化がカーダール時代末期から体制転換までの国内情勢や外交とどのように結びついたのかを探ることにある。分析に際して、ソ連の東欧政策がハンガリーの国内情勢に及ぼした影響、ルーマニアや東ドイツとの関係に及ぼした影響の二点に焦点をあてる。

第1章では、ゴルバチョフが書記長就任した後のソ連の東欧政策の変化がカーダール時代末期の国内情勢、国際環境とくに隣国ルーマニアとの関係に及ぼした影響を検証する。そして、内政、外交双方で無策なカーダールの退陣に至る経緯を論じる。第2章において、ソ連の東欧政策がグロース(Grósz Károly)政権成立後の国内情勢、国際環境とくに悪化する対ルーマニア関係に及ぼした影響を検証する。そして、グロース政権下のハンガリーの政治状況、外交について考える。第3章では、ゴルバチョフの不干涉姿勢が体制転換期のハンガリーの国内情勢、国際環境とくに対東ドイツ関係に及ぼした影響を検証する。そして、西ドイツへの亡命を求める東ドイツ人への国境開放を通して、体制転換期のハンガリー外交を論じる。最後に、社会主義労働者党内における改革派の主導権の確立とハンガリー外交の変化を促進した要因を考察する。

## 1. カーダール政権末期

### (1) ソ連の東欧政策とハンガリーの国内情勢

はじめに、ゴルバチョフの書記長就任以前の社会主義労働者党指導部と  
36(560) 法と政治 68巻3号 (2017年11月)

対ソ関係について述べる。1956年のハンガリー事件後、カーダールは蜂起の原因をつくったハンガリー勤労者党第一書記ラーコシ (Rákosi Mátyás), ゲレー (Gerő Ernő) の排除を進めるのと同時に、ソ連の本格的な軍事介入を招いた元首相ナジ (Nagy Imre) とその協力者を弾圧して党指導部の統一を進めた。1956年12月に社会主義労働者党暫定中央委員会は、ラーコシに代表される教条主義、ナジに代表される修正主義の双方を否定した中道路線を打ち出した。その後、1960年代初頭には、「反対しない者は味方」というカーダールの言葉に象徴されるような穏健な改革派から強硬な共産主義者まで多様な立場を内包した党指導部が形成された。

社会主義労働者党内の改革派と強硬な共産主義者との間での経済政策をめぐる意見の違いから、周期的に経済改革の前進と後退がみられた。だが、国内の安定のために両者の共存関係は維持された。カーダールは国民生活の向上に成功し国内の安定を維持することで、ソ連指導者の支持をつなぎとめることができた。そのため、カーダールは経済的な安定を維持するために経済改革や西側との経済交流を進めた。他方、経済改革を進めるうえで、ソ連の理解を得ることも不可欠であった。良好な対ソ関係を維持するには、ソ連に忠実な共産主義者の果たす役割も無視できなかった。

次に、ゴルバチョフの書記長就任後のソ連の東欧政策がハンガリーの国内情勢に及ぼした影響について述べる。1985年9月25日にカーダールはソ連を訪問し、ゴルバチョフと会談した。会談の中で、カーダールはハンガリー事件当時の体験とその後の社会主義労働者党の実績について語った。ゴルバチョフはハンガリー経済の西側依存を指摘し、経済の停滞の要因としての経済相互援助会議（コメコン）内の協力不足を指摘した。それに対して、ハンガリーは西側のみならず全世界経済に依存しているのであり、ポーランド経済の西側開放を推進した結果、対外債務の累積による経済危機を招いたギエレク (Edward Gierek) 統一労働者党第一書記と同じ失敗

を繰り返さないとカーダールは述べた。にもかかわらず、ハンガリーはすでに巨額の対外債務を抱えており、経済危機といえる状況にあった。さらに、ゴルバチョフはハンガリー国内の安定に果たしたこれまでのカーダールの役割を評価しながらも、同時に「ふさわしい後継者を見つけなければならない」と述べた。カーダールはすぐに引退する意思のないことを伝え<sup>(4)</sup>た。ゴルバチョフはすでにカーダールの統治能力の低下を認識していた。その後も、ゴルバチョフは会談する度にカーダールに引退を促した。

ソ連・ハンガリー関係に関して、当時の社会主義労働者党内の実情に詳しい知識人レンジュエル（Lengyel László）は歴代ソ連指導者とカーダールとの間に成り立っていた「パトロン・クライアント関係」の重要性を論じた<sup>(5)</sup>。ソ連の軍事介入の後で政権を掌握したカーダールにとって、自身の権力の正統性を高めるうえで、国民の生活水準を上昇させることが不可欠だった。同時に、カーダールに課せられたハンガリー経済の持続的な成長には、ソ連からの安価な原油や天然ガスなどの供給が必要だった。1956年以後、カーダールはソ連の支持や支援を得ながら、ソ連指導者の期待に応えてきた。しかし、ゴルバチョフとカーダールの間には、フルシチョフ（Nikita S. Khrushchev）、ブレジネフ（Leonid I. Brezhnev）、アンドロポフ（Yurii V. Andropov）の時代と同様のパトロンとクライアントの関係が成立しなかった。ゴルバチョフ時代のソ連には、カーダールが期待するような支援を行う経済的余裕などなかった。ゴルバチョフはハンガリーの経済危機を陣営内部での深刻な問題と捉えており、危機を招いたカーダールを支えることの必要性を感じていなかったといえる。

イギリスのソ連研究者ハードマン（Helen Hardman）がゴルバチョフによる「ペレストロイカの東欧への輸出」と論じたように、ゴルバチョフは自身と同様の路線を東欧に求めており、最初に意図したのはカーダールの書記長辞任と社会主義労働者党指導部の刷新であった。とくに、ゴルバチョ

38(562) 法と政治 68巻3号 (2017年11月)

フが東欧の党に促したのは党全国会議の開催であった。<sup>(6)</sup> 5年毎に開催の党大会と同様、党全国会議では政治局の人事刷新が可能だった。

ゴルバチョフによるソ連の東欧政策の変化と経済危機により、社会主義労働者党内はポジュガイ (Pozsgay Imre) など抜本的な改革を主張する党内反対派、首相グロースなど中間派、変革を拒むカーダールを支持し続ける守旧派などに分かれた。

1987年7月17日、18日にグロースがソ連を訪問し、ゴルバチョフ、レイシコフ (Nikolay I. Ryzhkov) 首相と会談した。グロースはハンガリー国内の政治情勢について説明し、社会主義労働者党への批判が強まっていることを認めた。会談の中で、ゴルバチョフはグロースに党内人事の刷新の重要性を強調した。<sup>(7)</sup> ハンガリーの現代史家ライネル (Rainer M. János) が指摘したように、この会談の時点でゴルバチョフとグロースがカーダールの交代で合意していたと考えられる。<sup>(8)</sup> 少なくとも、ゴルバチョフがグロースをカーダールの最も有力な後継者と認識したことは間違いない。

## (2) ソ連の東欧政策とハンガリーをとりまく国際環境

ゴルバチョフが中距離核戦力 (INF) の全廃など西側との関係改善を進めると、1960年代半ば以降に展開されたルーマニアの自主外交は存在意義を失った。その結果、経済の不振と相俟って、ルーマニア国内ではナショナリズムが鼓舞された。ゴルバチョフは旧態依然とした東欧の指導者への批判をひかえていたにもかかわらず、1987年5月にルーマニアを訪問した際にルーマニア共産党書記長チャウシェスク (Nicolae Ceaușescu) を批判していた。<sup>(9)</sup> さらに、チャウシェスクは農村改造を意図して、近代化に取り残されながらも貴重な伝統文化の残るトランシルヴァニア地方の農村の破壊を始めた。1988年4月29日には、チャウシェスクが2000年までに農村改造の計画を終わらせると発表した。<sup>(10)</sup> その結果、多くの人々が難民となっ

てハンガリーに流入した。その大半がハンガリー系少数民族だった。

難民の流入により、ハンガリー・ルーマニア関係は悪化した。しかし、カーダールは何ら行動を起こすことはなかった。ルーマニアの内政が硬直化するにつれて、カーダールはチュウシェスクとの会談を回避するようになった。実際、1977年6月のオラデア、デブレツェンでの会談以降、両者の首脳会談は開催されなかった。カーダール政権下では、ルーマニアをはじめ近隣諸国のハンガリー系少数民族の問題はタブーのままだった。

1988年2月1日、ブダペシュトのルーマニア大使館前でハンガリー系少数民族への人権侵害に抗議するためのデモが開催された。社会主義陣営内部において同盟国の在外公館前で公然と抗議行動が行われたこと自体、異例であったことはいうまでもない。2月2日、駐ハンガリー・ルーマニア大使ヴェレシュ (Nicolae Veres) がハンガリー外務省にデモについて当局の関与を示唆して抗議した。<sup>(11)</sup> 無論、ハンガリー外務省は当局の関与を否定した。2月8日にチャウシェスクが演説の中で、外国からの自国への内政干渉に言及した。<sup>(15)</sup> チャウシェスクはデモを取り締まらなかったハンガリーを暗に批判した。

当局が容認したルーマニアに抗議するデモは、ドナウ川の水力発電のダム建設の反対運動とならんで変革を求める党内外の動きを活発化させたといえる。当時、難民支援に積極的な民主フォーラムをはじめ、青年民主連合 (フィデス)、自由民主連合など在野の反体制派の自発的な組織化が進行していた。

### (3) カーダール退陣

ハンガリー国内では、カーダール退陣のための党全国会議開催へ動きが本格化した。1987年12月に党中央委員会が党全国会議の開催に賛成していたと、当時の社会主義労働者党政治局員ベレツ (Berecz János) は指摘  
40(564) 法と政治 68巻3号 (2017年11月)

する。ベレッツによれば、党内では古参幹部の反対によって、党大会でなく党全国会議の開催が議論された。党全国会議の開催が不可避となると、カーダールとその支持者は同会議の準備段階で主導権を握ろうとした。彼らには、会議で予想される後継の書記長の人選を有利に進めることが重要な課題であった。とくに、カーダールにとって、自らの退陣後にハンガリー事件に対する歴史的評価を見直す動きが生じることは避けなくてはならなかった。にもかかわらず、3月23日から24日に開催された社会主義労働者党中央委員会は、5月開催予定の党全国会議準備のための調整委員会議長へのカーダールの選出を否決した。<sup>(13)</sup>

5月20日から22日に開催された党全国会議で、カーダールは書記長を辞任した。同会議でのカーダールの演説に対して、出席者の大半の反応は冷ややかであったと、イギリスのハンガリー研究者ゴフ (Roger Gough) は述べる。<sup>(14)</sup> 現実には、カーダールの期待に反して、党全国会議は新書記長グロース主導で進行した。その結果、カーダールを支持してきた5名の政治局員ラーザール (Lázár György)、ネーメト (Németh Károly)、オーヴァリ (Óvari Miklós)、ガーシュパール (Gáspár Sándor)、ハヴァシ (Havasi Ferenc) は党中央委員にすら再選されずに政治局から追われた。彼らに代わって、ボジュガイが政治局入りした。1968年の経済改革で中心的な役割を果たしたニエルシュ (Nyers Rezső) も13年ぶりに政治局に復帰した。

## 2. グロース政権期

### (1) ソ連の東欧政策とハンガリーの国内情勢

ゴルバチョフにとって、自身と同様に党組織を基盤として、規律や秩序を重視しながら漸進的に経済や党組織の改革を進めようとするグロースの方が、民主化を求める在野勢力との連携も視野に入れたボジュガイよりも与しやすい相手だった。書記長就任後の1988年7月4日から5日にグロー

スはソ連を訪問し、ゴルバチョフと会談した。会談では、ハンガリーの経済改革プログラムや在野勢力の動向など国内情勢について意見が交わされた。同時に、グロースはルーマニアとの関係悪化にも言及した。カーダールの退陣後も、国内ではルーマニアへの抗議行動が続いていた。6月27日には、4000人といわれる1956年以降で最大規模の自発的なデモが行われた。翌28日にルーマニアがクルージュ・ナポカのハンガリー総領事館の閉鎖と館員の国外退去を命じるなど、二国間関係はさらに悪化していた。グロースはゴルバチョフの支持を得ることを期待した。にもかかわらず、ゴルバチョフは内政不干渉の立場を取り、グロースにルーマニアとの対話の必要性を説くにとどまった。<sup>(15)</sup>

グロースにとって、難民流入をめぐる対ルーマニア関係は、経済再建とともに重要な政策課題だった。難民問題への対応次第では、抗議の矛先がルーマニアから党指導部に向きかねなかった。ゴルバチョフからの支持を得られなかったグロースは、チャウシェスクとの首脳同士の対話による事態の打開をめざした。チャウシェスクとの首脳会談に関して、駐ルーマニア大使スーチ（Szűts Pál）など、拙速な会談開催に慎重な意見が外務省内に存在した。<sup>(16)</sup>にもかかわらず、グロースが首脳会談を決断した背景には、党指導部内の主導権争いがあったと考えられる。当時、ボジュガイは難民の支援に積極的でルーマニアへの反発を強める民主フォーラムと連携しており、グロースは国内で彼の影響力が強まることを警戒していた。

さらに、ソ連共産党内には、ゴルバチョフと異なる立場から、ハンガリーに対してルーマニアとの関係修復を迫る動きも存在したとみられる。リガチョフ（Egor K. Ligachyov）政治局員などソ連共産党内の守旧派がグロースにチャウシェスクとの話し合いを強く求めたと、社会主義労働者党中央委員会国際部で対ルーマニア政策に関与したソカイ（Szokai Imre）が指摘している。<sup>(17)</sup>ルーマニアとの対話を求めたソ連共産党守旧派の意図は明確で

42(566) 法と政治 68巻3号 (2017年11月)



はない。だが、他のソ連・東欧諸国に先駆けて経済改革が行われ、国内で隣国ルーマニアに対する抗議行動が公然と行われているハンガリーの動向を懸念する声がソ連共産党指導部内に存在していたことは明らかである。

## (2) ソ連の東欧政策とハンガリーをとりまく国際環境

先述のように、ゴルバチョフは1987年のルーマニア訪問の際に チャウシェスクを批判した。しかし、同時に、ゴルバチョフはチャウシェスクに勲章を授与していた。勲章授与に対して、後述するアラド会談の後で訪ソした際にハンガリー外務次官ホルン (Horn Gyula) が、ゴルバチョフの外交顧問ザグラジン (Vadim V. Zagladin) に不快感を示した<sup>(18)</sup>。また、1988年7月のグロースとの会談で、ゴルバチョフは対ルーマニア関係について不干渉の立場を示した。チャウシェスクにとって、ソ連からの強い圧力のない以上、グロースとの首脳会談でハンガリー系少数民族をめぐると問題について譲歩する必要などなかった。

グロースとチャウシェスクとの首脳会談は、8月28日にルーマニアのアラドで開催された。グロースが会談の冒頭で「両国の好ましくない関係は双方に等しく責任がある」と述べたことを、ハンガリーの現代史研究者フェルデシュ (Földes György) は過ちだったと指摘する。会談の際、ルーマニアの少数民族政策に関して、ハンガリーには領土要求はなく、人権や母語の自由な使用を求めるとグロースは述べた。他方、難民の問題はルーマニアでなくハンガリーの国内問題であり、ルーマニア当局は自国民の不法な越境の阻止に努めているとチャウシェスクは強調した。さらに、チャウシェスクはハンガリーの内政干渉を理由に、ハンガリーが要求した農村改造への現地調査やクルージュ・ナポカの総領事館の再開を拒否した<sup>(19)</sup>。会談の主導権は、終始、チャウシェスクに握られていた。

アラド会談の後、ハンガリー国内では、グロースへの批判が強まった。

在野知識人と連携したポジュガイは、公然とアラド会談への不満を表明していた。また、民主フォーラムがアラド会談に失望してグロースの辞任を要求していた。<sup>(20)</sup>さらに、アラド会談の後、ハンガリーへの非合法的越境を試みる者が一週間に400名に増加した。<sup>(21)</sup>そのような状況下での9月14日、ハンガリーへの亡命を求める12名のハンガリー系ルーマニア人がブルガリアの首都ソフィアのハンガリー大使館に保護を求めた。

ハンガリーはルーマニアに12名の平和的な自国への出国に理解を求めた。だが、ルーマニアはいったん12名を帰国させた後でハンガリーに出国させると主張した。<sup>(22)</sup>ハンガリーには、人道的な見地から12名をルーマニアに引き渡すことなどできなかった。

ルーマニアが12名を一度帰国させる原則的な立場を崩さない状況下で、ハンガリーは国際赤十字など国際機関の旅行証明書で12名の第三国、具体的にはスイスかオーストリアへの出国を模索した。11月14日から18日にハンガリーの要請で国際赤十字の代表がソフィアを訪れた。11月23日、ハンガリー赤十字が書簡でブルガリア赤十字に協力を要請した。さらに、12月9日から10日に両国の赤十字社長が協議した。<sup>(23)</sup>ソフィアでの亡命問題は、国際赤十字の仲介による解決への道が開かれた。最終的に、1989年2月17日に12名のハンガリー系ルーマニア人は国際赤十字の旅行証明書を携えて、空路でオーストリアの首都ウィーンへ向かった。<sup>(24)</sup>

国際赤十字の仲介による第三国経由での自国民のハンガリー亡命の動きを、ルーマニアも察知していた。国際赤十字の代表のソフィア訪問直後の11月19日、ブカレストのハンガリー大使館のジェールフィ（Győrfi Károly）参事官が「バルソナ・ノン・グラータ（好ましくない人物）」として3日以内の国外退去を命じられた。ルーマニアはハンガリーによる国際赤十字へのはたらきかけをジェールフィの国外退去の理由として挙げていない。だが、ルーマニアにとって、ジェールフィ追放が自国を排除した形でソフィア

44(568) 法と政治 68巻3号 (2017年11月)

アの亡命問題の解決を模索するハンガリーへの抗議の意思だったことは明白である。ハンガリー外務省はキラ（Ioan Chira）代理公使へ抗議文を手渡した。キラはハンガリーの抗議に自国の内政問題であるとの立場で反論した。11月24日、ハンガリーは報復措置としてルーマニア大使館のプラトナ（Pavel Platona）参事官に国外退去を命じた。<sup>(25)</sup>

### （3）グロース政権下での政治状況と外交

書記長就任後の首脳会談で、グロースはゴルバチョフから内政に干渉しない確証を得たと考えられる。しかしながら、ゴルバチョフがハンガリーの内政ばかりでなく、ルーマニアとの対立にも関与しない姿勢を取るかぎり、グロースには、ルーマニアから流入する難民の問題で国際社会の支援を求める以外に選択肢がなかった。実際に、ハンガリーはソフィアのハンガリー系ルーマニア人の亡命事件は国際赤十字の協力を得ることで解決できた。ソフィアでの亡命事件はハンガリーに国際機関との連携の必要性を実感させ、1989年3月14日の「難民の地位に関する条約」（難民条約）加盟の契機となった。

ハンガリーの難民条約加盟には、ルーマニアのみならず、他の東欧諸国との対立を招く可能性があった。何故なら、加盟によって、ハンガリーは西側への亡命を求めて他の東欧諸国から自国に入ってきた人々を送還することがゆるされなくなるのである。

アラド会談の躓きで求心力を低下させたグロースは、ソフィアでの亡命事件で指導力を発揮できなかった。先述のように、ボジュガイがグロースの失政を批判していた。また、1988年11月には、より踏み込んだ改革を意図したネーメト（Németh Miklós）が首相に就任するなど、改革派の台頭でグロースの権力基盤が揺らぎ始めていた。

### 3. 体制転換期

#### (1) ソ連の東欧政策とハンガリーの国内情勢

1989年に入ると、ハンガリーでは複数政党制が復活するなど、経済領域を越えた抜本的な改革が始まった。また、2月にはボジュガイが1956年のハンガリー事件の歴史的評価の見直しを主張した。さらに、オーストリア国境の鉄条網撤去の動きが生じた。2月28日、社会主義労働者党政治局は鉄条網の撤去を決定した。1987年にハンガリーで外国旅行が自由化されると、自国民の西側逃亡を阻止するためにオーストリアとの国境に張りめぐらされた鉄条網の存在理由がなくなった。オーストリアとの国境に鉄条網がなくなると、改革を拒否して厳しい国内統制を維持するルーマニアや東ドイツから西側諸国への亡命希望者がハンガリーに殺到することが考えられた。2月28日の政治局の協議では、グロースが鉄条網撤去に際してソ連、東ドイツと協議することの重要性を説いていた。<sup>(26)</sup>

3月3日にネーメトがモスクワを訪問し、ハンガリーで進行する政治制度の改革についてゴルバチョフに経済再建に不可欠であると説明した。ゴルバチョフはボジュガイによるハンガリー事件の再評価の動きを警戒しながらも、改革に反対しなかった。さらに、ネーメトはゴルバチョフから鉄条網撤去の了承を得た。ネーメトは鉄条網について「今やハンガリーを経由して非合法に逃れようとするルーマニアや東ドイツからの市民を捕捉するためだけに役立つものである。ハンガリー人はもはや越境しようとしな。合法的に出国する機会がある。無論、われわれは東ドイツの同志たちに話さねばならないだろう」と述べた。<sup>(27)</sup>ゴルバチョフは鉄条網撤去に異論を唱えなかった。

ソ連から帰国したネーメトは、駐ハンガリー・東ドイツ大使フェーレス(Gerd Vehres)をはじめとする社会主義諸国の大使に鉄条網の撤去の意図  
46(570) 法と政治 68巻3号 (2017年11月)

<sup>(28)</sup>を伝えた。2月28日のグロースの指摘にもかかわらず、ネーメトはゴルバチョフのケースと異なり東ドイツの首脳に直接、鉄条網撤去の経緯を詳しく説明しなかった。

3月23日から24日にグロースがソ連を訪問し、ゴルバチョフと会談した。会談では、ハンガリー事件の評価が議題となった。グロースは「反革命」という従来の事件への評価を繰り返した。ゴルバチョフはグロースを支持しなかった。ゴルバチョフは事件をどう評価するのかは「あなたがた次第である」と述べて、ハンガリー国内での論争に干渉しなかった。<sup>(29)</sup>

改革やハンガリー事件の再評価に否定的なグロースの国内での求心力の低下に加えて、変革の過程で政策決定の権限が社会主義労働者党からネーメト首班の政府に移りつつあった。実際に、鉄条網の撤去が開始された直後の5月10日には、外務次官から外相に就任したホルン、財務相に就任したベーケシ（Békesi László）など、改革派が入閣を果たした。さらに、ハンガリー事件への再評価が進む中で、6月16日にナジ元首相の再埋葬式と名誉回復がなされた。最終的に、6月24日の党中央委員会でこれまで書記長の有していた権限が党議長ニエルシュ、グロース、ネーメト、ボジュガイの4名からなる幹部会に移った。<sup>(30)</sup>事実上、グロースは失脚した。

## (2) ソ連の東欧政策とハンガリーをとりまく国際環境

ゴルバチョフはハンガリーのみならず他の東欧諸国にも党指導部の刷新や改革を促していた。だが、東ドイツ、チェコスロヴァキア、ルーマニアはゴルバチョフに反発した。ソ連でペレストロイカやグラスノスチが始まったにもかかわらず、頑なに変化を拒む社会主義統一党指導部への東ドイツ国民の失望や反発が広がっていた。ハンガリーが5月2日に鉄条網の撤去を始めると、東ドイツはオーストリア経由での西ドイツへの出国を意図するハンガリーへの旅行者の急増を警戒した。5月16日に東ベルリンの

ハンガリー大使館からの報告をもとに作成された外務省の文書には、1988年当時からハンガリーによるオーストリア国境の鉄条網の撤去が自国民のハンガリーへの流入を引き起こす可能性に東ドイツ国防次官が言及していたこと、ハンガリーの難民条約加盟で予想される東ドイツ国民への対応の変化に東ドイツの諸機関が関心を持っていたことが記されていた。<sup>(31)</sup>

ハンガリーで改革の動きが加速化すると、東ドイツはハンガリーへの批判を強めた。さらに、ハンガリー・東ドイツ関係は鉄条網撤去で悪化した。6月12日の難民条約発効に合わせて、東ドイツはハンガリーに圧力をかけてきた。6月12日から14日に、ニーブリング (Gerhard Niebling) 少将に率いられた国家保安省 (Stasi) 代表団がハンガリーを訪問した。難民の地位に関連して、代表団はブダペシュトの西ドイツ大使館による東ドイツ人へのパスポート発行の是非について問いただした。ハンガリー内務省は法律の不備を理由に即答できないと答えた。東ドイツはハンガリーの入国管理機関との話し合いを継続し、両国にとって受け入れ可能な解決方法とその実践を求めた。<sup>(32)</sup>

### (3) ハンガリーの国境開放

ゴルバチョフの内政不干渉の姿勢にもかかわらず、改革派は依然として自国の動向に対するソ連の反応に敏感であったことが、7月24日からソ連を訪問した際のニエルシュの姿勢からうかがえる。3月のグロース訪ソを契機に、ハンガリーに駐留するソ連軍の撤退について話し合いが始まった。だが、ソ連側は撤退へ向けた両国の合意を公表するのに慎重な姿勢であった。7月8日のブカレストでのワルシャワ条約機構首脳会議でも、ニエルシュはゴルバチョフに自国内で高まる反ソ的な雰囲気や権力の真空状態に陥る危険性を指摘し、改革を慎重に進める必要性を語った。モスクワでもニエルシュは民主化の進行状況をゴルバチョフに説明する一方で、

48(572) 法と政治 68巻3号 (2017年11月)

駐留軍撤退の発表に慎重なソ連の立場を支持した。<sup>(33)</sup>

1989年の夏、西ドイツへの亡命を希望する東ドイツ人がハンガリー国内に殺到した。東ドイツ当局が対策を講じるよりも早く、多くの東ドイツ人が夏季休暇を口実にハンガリーに入国した。8月8日にフェーレスがハンガリー外務省を訪れて、社会主義統一党中央委員会および東ドイツ外務省の立場を伝えた。フェーレスは二国間協定を根拠にハンガリーに自国民の西ドイツへの出国を認めないよう要求した。ハンガリーと東ドイツは、1969年6月20日に観光ヴィザの免除に関する協定を締結した。同協定の第6条によれば、一方の締結国の国民は相手国に30日間滞在可能で、相手国の大使館、総領事館が同意した場合のみ滞在期間の延長が可能であった。また、同協定の第8条では、一方の締結国の旅行者が相手国の法律に違反した場合、相手国は旅行者の滞在許可を取り消して帰国させることができると規定されていた。東ドイツは第6条、第8条にもとづいて滞在許可の期限が切れたにもかかわらずハンガリーにとどまっている自国民の送還を迫った。ショモジ (Somogyi Ferenc) 外務次官は難民条約加盟で生じた義務に言及し、送還を拒否した。<sup>(34)</sup>

8月下旬、ハンガリーは決断を迫られていた。8月21日の深夜、ケーセグ近郊のオーストリア国境でハンガリー国境警備隊が越境を試みた東ドイツ人に発砲して死亡させる事件が発生した。同様の発砲事件は、8月18日にソンバトヘイ付近でも発生していた。8月22日にハンガリー政府は自国内の東ドイツ人を自由に出国させることを決定した。ハンガリー出身のジャーナリスト、オプラトカ (Oplatka András) が述べるように、政策決定はネーメト、ホルン、内相ホルヴァート (Horváth István)、法務事務次官ボリチ (Borics Gyula)、首相府スタッフのイエネイ (Jenei György)、モハイ (Mohai László) によってなされた。<sup>(35)</sup> はじめに、ハンガリーは西ドイツ大使館にいる東ドイツ人の国際赤十字の仲介で出国させた。24日の

深夜、西ドイツ大使館にいた東ドイツ人117名が空路でオーストリアへ出国した。この措置には、前章で述べたソフィアのハンガリー大使館へ駆け込んだハンガリー系ルーマニア人をオーストリアへ出国させた経験が活かされていた。さらに、ハンガリー政府は自国にいる西ドイツ亡命を希望するすべての東ドイツ人の出国へ向けた準備を始めた。

8月25日、ネーメトとホルンが東ドイツ人の出国問題を協議するため首都ボン郊外のギムニッヒ宮殿で西ドイツ首相コール（Helmut Kohl）、外相ゲンシャー（Hans-Dietrich Genscher）と会談した。ネーメトは人道的な立場から東ドイツ人に国境を開放すると伝えた。<sup>(37)</sup>ハンガリーにとって、西ドイツ亡命を意図する東ドイツ人のための国境開放は、慎重にソ連と協議して決定すべき問題であった。だが、当時の駐西ドイツ・ハンガリー大使ホルヴァート（Horváth István）の回想録によれば、ハンガリー政府はギムニッヒ会談の前後に東ドイツ人問題をソ連と協議していなかった。ハンガリーから国境開放の決定がゴルバチョフに伝えられたのは、9月8日であった。<sup>(38)</sup>

9月8日にハンガリー外務省がフェーレスに渡した文書には「1969年に結ばれたドイツ民主共和国政府との観光ヴィザの免除に関する協定の第6条および第8条の効力を一时无効とする」と記されていた。さらに、ハンガリーは東ドイツ人の出国開始を9月11日午前零時と通告した。<sup>(39)</sup>9月11日、東ドイツ人のオーストリア経由の西ドイツ移送が始まった。

ハンガリーの国境開放に関して、オブラトカは西ドイツからの支持を背景にして早期に国境開放を決断したネーメトの役割に力点を置く。<sup>(40)</sup>アメリカ人ジャーナリストのマイヤー（Michael Meyer）も、コールの安全保障担当の主任補佐官テルチク（Horst Teltschik）が1980年代半ばからネーメトなどのハンガリーの改革派と接触していたと指摘する。<sup>(41)</sup>他方、ホルンの評伝の著者ピュンケシュティ（Pünkösti Árpád）は国際環境を見極めなが



ら東西ドイツ双方との交渉を進めたホルンの役割を評価する。<sup>(42)</sup>確かに、ホルンは法的に正当な問題解決やソ連側の動向に注意を払うことの重要性から、性急な国境開放と東ドイツ人の出国に慎重だったといえる。ホルンが国境を開放する姿勢に転じた背景には、国境での発砲事件があった。ホルンは回想録で発砲事件を通して事態の深刻さを実感したと語っている。<sup>(43)</sup>いずれにせよ、国境開放を決断することで、より早いハンガリーの対ソ自立を主導したのはネーメトであったと考えられる。

## お わ り に

カーダール政権末期から改革派主導による体制転換に至る過程において、先行研究で指摘されたように、ソ連が東欧の内政に干渉しなくなったことが、ハンガリーの体制転換への動きを促進した点は重要である。

しかしながら、ゴルバチョフは一貫してハンガリーの内政に不干渉の姿勢を取っていたのではなかった。先述のレンジェルが論じたような、歴代ソ連指導者とカーダールとの間でのパトロンとクライアントの関係がゴルバチョフとの間で成立しなかったばかりか、ゴルバチョフは書記長就任もない時期から社会主義労働者党指導部の刷新を意図して、カーダールに引退を迫っていた。ソ連からの支持が得られなくなった結果、経済危機に加えて、ルーマニアからの難民流入を前に何も対応できないカーダールの書記長辞任は不可避となった。ゴルバチョフによる社会主義労働者党指導部人事への干渉は、カーダールの退陣とグロースの書記長就任への牽引力となった。

しかしながら、ゴルバチョフはカーダール退陣の後で、ハンガリーの国内情勢に対して不干渉の姿勢に転じた。確かに、ゴルバチョフはハンガリーの党内人事や内政に関心を持っていた。だが、ゴルバチョフにはグロースとの個人的な関係を強化しても、「パトロン」としてふるまう意図などな

かった。実際に、グロースは首相に就任した後の1987年7月にソ連を訪問した時点で、ゴルバチョフから経済的な支援を引き出せなかった。<sup>(44)</sup>駐ソ大使ライナイ (Rajnai Sándor) は1987年4月3日に社会主義労働者党中央委員会宛てに送った報告で、ソ連から政治的な支持を得られても、経済的な支援は期待できないと指摘していた。<sup>(45)</sup>

書記長就任後のグロースは悪化する対ルーマニア関係において、ゴルバチョフの支持を得ることを期待した。にもかかわらず、ゴルバチョフは二国間の問題にも干渉しなかった。そのため、グロースはチャウシェスクとの首脳会談による自力での事態の打開を試みた。しかし、アラドでの会談が成果なく終わると、対ルーマニア関係がさらに悪化した。同時に、アラド会談の結果、グロースの指導力が低下し、党内でボジュガイなどの改革派が発言力を強めた。さらに、ハンガリーはルーマニアからの難民問題で、ソ連よりも国際社会からの支援の重要性を認識した。

1989年に入って、ハンガリーで政治制度の民主化も含めた抜本的な改革が進行し、オーストリア国境に張りめぐらされた鉄条網が撤去される中で、ゴルバチョフの内政、外交への不干渉は維持された。だが、体制転換が始まった当初、改革に及び腰となったグロースのみならず、ニエルシュなど党内の主導権を握った改革派もソ連の動向に配慮していた。にもかかわらず、西ドイツ亡命を求める東ドイツ市民が自国に殺到すると、ネーメトとホルンは西ドイツからの支持を得て彼らのためにオーストリア国境を開放した。その結果、ハンガリーは本格的にソ連からの自立へと踏み出した。

社会主義労働者党の改革派の主導による体制転換に至るハンガリーの国内情勢には、たんなるゴルバチョフによる内政不干渉の姿勢でなく、むしろ、先述のように一貫性を欠いたゴルバチョフの東欧政策が大きな影響を及ぼした。さらに、体制転換の段階におけるハンガリー外交の変化の背景

には、国際環境の変動によって生じたルーマニアからの難民、西ドイツ亡命を求める東ドイツ市民の流入などヒトの移動が存在したのである。

注

- (1) Bodzabán-Szalay 1994; Tőkés 1996; Lengyel 1998; Huszár 2003; Gough 2006; Baráth 2014; Ripp 2006.
- (2) Rainer 2003; Hardman 2012.
- (3) 対ルーマニア関係に関しては、Földes 2007; Révész 2008; Novák 2012; Kaszás 2015. 対東ドイツ関係に関しては、Nagy 2001; Oplatka 2008; Oplatka 2010; Tóth 2009; Gyarmati 2009.
- (4) 社会主義労働者党のゴルバチョフ・カードール会談の記録（ハンガリー語訳）、Baráth-Rainer 2000, 78-87.
- (5) Lengyel 1998, 41.
- (6) Hardman 2012, 108.
- (7) グロースの社会主義労働者党政治局への報告（1987年7月21日）、Baráth-Rainer 2000, 111-119.
- (8) Rainer 2003, 195.
- (9) Baráth 2014, 283.
- (10) Nagy 1993, 265.
- (11) ハンガリー外務省の記録文書（1988年2月2日）、MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-151 00718 1988 (85. doboz).
- (15) ブカレストのハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電報（1988年2月8日）、MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-14 00906 1988 (85. doboz).
- (12) Berecz 2008, 282.
- (13) Tőkés 1996, 282; Gough 2006, 237; 社会主義労働者党中央委員会議事録（1998年3月23日～24日）、MNL OL M-KS 288. f. 4/232-235. ő. e.
- (14) Gough 2006, 238.
- (15) ゴルバチョフ基金所蔵の1988年7月5日のゴルバチョフとグロースの会談記録（ハンガリー語訳）、Baráth-Rainer 2000, 137-138.
- (16) Szűts 1998, 125-126.
- (17) Bodzabán-Szalay 1994, 106.
- (18) ゴルバチョフ基金所蔵の1988年9月8日のザグラジンとホルンの会談記録（ハンガリー語訳）、Baráth-Rainer 2000, 231-232.
- (19) 社会主義労働者党政治局議事録（1988年9月6日）、MNL OL M-KS

- 288 f. 5/1035 ő.e.; Szűrös 2013, 162-164; Szűts 1998, 142-159; Földes 2007, 424-429.
- (20) Szűrös 2013, 168.; ゴルバチョフ基金所蔵の1988年9月8日のザグザンと社会主義労働者党元政治局員アツェール (Aczél György) の会談記録 (ハンガリー語訳), Baráth-Rainer 2000, 225.
  - (21) Kaszás 2015, 59.
  - (22) Szűts 1998, 181.
  - (23) グロースへの報告のために作成されたソフィアの亡命問題に関するハンガリー外務省の文書 (1988年12月21日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-29 003900/12* (86. doboz).
  - (24) Révész 2008, 62.
  - (25) ハンガリー大使館の本国外務省宛ての暗号電文 (1988年11月19日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-004487/5* 1988 (85. doboz); ルーマニア大使館の回答に関するハンガリー外務省の記録文書 (1988年11月19日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-004487/6* 1988 (85. doboz); ハンガリー外務省の記録文書 (1988年11月24日), *MNL OL XIX-J-1-j Románia-128-004487/10* 1988 (85. doboz).
  - (26) 社会主義労働者党政治局議事録 (1989年2月28日), *MNL OL M-KS 288. f. 5/1054. ő.e.*
  - (27) ゴルバチョフ基金所蔵のゴルバチョフ・ネーメト会談 (1989年3月3日) の記録 (ハンガリー語訳), Baráth-Rainer 2000, 158-159, 166.
  - (28) Oplatka 2008, 75.
  - (29) Savranskaya-Blanton-Zubok 2010, 418-419.
  - (30) Bodzabán-Szalay 1994, 30-31.
  - (31) ハンガリー外務省の記録文書 (1989年5月16日), *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-3 002367* 1989 (63. doboz).
  - (32) ハンガリー内務省の報告 (1989年6月15日), Jobst 2010, 6.
  - (33) 社会主義労働者党の首脳会談の記録 (1989年7月12日, 1989年7月30日), Baráth-Rainer 2000, 188; 196-197.
  - (34) ハンガリー外務省の記録文書 (1989年8月8日), *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/2* 1989 (63. doboz).
  - (35) Oplatka 2010, 62.
  - (36) Oplatka 2008, 198.
  - (37) Horn 1991, 246; Horváth 2009, 156-157.
  - (38) Horváth 2009, 157.

- (39) ハンガリー外務省の記録文書（1989年9月8日）, *MNL OL* XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/10 1989 (63. doboz).
- (40) Oplatka 2008, 199.
- (41) マイヤー 2010, 136-137.
- (42) Pünkösti 2013, 176-177, 187, 189.
- (43) Horn 1991, 243.
- (44) Baráth-Rainer 2000, 115-119.
- (45) Baráth-Rainer 2000, 203-206.

論

説

## 参 考 文 献

### 未公開文書

*Magyar Nemzeti Levéltár Országos Levéltár* (*MNL OL*), Budapest: MDP-MSZMP Iratok, 1985-1988.

*Magyar Nemzeti Levéltár Országos Levéltár*, Budapest: KÜM TÜK Iratok, Románia, 1988.

*Magyar Nemzeti Levéltár Országos Levéltár*, Budapest: KÜM TÜK Iratok, NDK, 1989.

### 公刊資料集

Szerk.: Baráth Magdolna, Rainer M. János. (2000), *Gorbacsov tárgyalásai magyar vezetőkkel: Dokumentumok az egykori SZKP és MSZMP archívumaiból 1985-1991*, Budapest: 1956-os Intézet.

Savranskaya, Svetlana, Thomas Blanton, and Vladislav Zubok, eds. (2010), *Masterpieces of History: The Peaceful End of the Cold War in Europe, 1989*, Budapest-New York: Central European University Press.

### 回想録

Berecz János (2008), *Kádár élt ... az velünk van! 2*, Budapest: Duna International.

Horn Gyula (1991), *Cölöpök*, Budapest: Zenit Könyvek.

Horváth István (2009), *Az elszalasztott lehetőség: A magyar-német kapcsolatok 1980-1991*, Budapest: Corvina Kiadó.

Szűrös Mányás (2013), *Szűk volt a mundér: Egy magyar diplomata emlékezései és emlékeztetése (1959-2013)*, Budapest: Püski.

Szűts Pál (1998), *Bukaresti napló 1985-1990*, Budapest: Osiris.

### 二次文献

マイケル・マイヤー著, 早良哲夫訳 (2010), 『1989—世界を変えた年—』

作品社。

- Baráth Magdolna (2014), *A kreml árnyékában: Tanulmányok Magyarország és a Szovjetunió kapcsolatainak történetéhez, 1944–1990*, Budapest: Godolat.
- Szerk.: Bodzabán István, Szalay Antal (1994), *A puha diktatúrától a kemény demokráciáig*, Budapest: Pelikán Kiadó.
- Földes György (2007), *Magyarország, Románia és a nemzeti kérdés · 1956–1989*, Budapest: Napvilág Kiadó.
- Gough, Roger (2006), *A Good Comrade: János Kádár, Communism and Hungary*, New York: I. B. Tauris.
- Gyarmati György (2009), “A vasfüggöny és az állambiztonsági szervek alkonya Magyarországon 1989-ben,” *Múltunk*, 4, 39–63.
- Hardman, Helen (2012), *Gorbachev's Export of Perestroika to Eastern Europe: Democratisation Reconsidered*, Manchester: Manchester University Press.
- Huszár Tibor (2003), *Kádár János politikai életrajza 1957. november–1989. június 2. kötet*, Budapest: Szabad Tér Kiadó-Kossuth Kiadó.
- Jobst Ágnes (2010), “Az állambizottság és a keletnémet menekültügy: Dokumentumok a genfi menekültügyi egyezményhez való magyar csatlakozásról,” *Betekintő*, 3. [http://www.betekinto.hu/2010\\_3\\_jobst](http://www.betekinto.hu/2010_3_jobst) (accessed 2014-12-14)
- Kaszás Veronika (2015), *Erdélyi menekültek Magyarországon 1988–89*, Budapest: Gondolat.
- Lengyel László (1998), “A kádári párt bukása: az utódlási harc,” *Rubicon*, 1, 40–45.
- Nagy László (2001), “A Páneurópai Piknik és az 1989. szeptember 11-i határnyitás,” *Soproni Szemle*, 55, 75–87.
- Szerk.: Nagy Miklós (1993), *A magyar külpolitika 1956–1989: Történeti kronológia*, Budapest: MTA Jelenkorkutató Bizottság.
- Novák Csaba Zoltán (2012), „Barátságra ítélve.” Kádár János és Nicolae Ceaușescu. In Szerk.: Földes György-Mitrovits Miklós, *Kádár János és a 20. századi magyar történelem*, 147–167.
- Oplatka András (2008), *Egy döntés története: Magyar határnyitás–1989. szeptember 11. nulla óra*, Budapest: Helikon.
- Oplatka András (2010), ‘A Páneurópai Piknik—ismert tények és fehér foltok.’ In Szerk.: Gyarmati György, *A Páneurópai Piknik és határtörés húsz év távlatából*, Sopron-Budapest: Sopron Megyei Város Önkormányzata –

- L'Harmattan Kiadó, 59-66.
- Pütkösti Árpád (2013), *A Horn Angyalföldtől a pártelnökségig (1932-1990)*, Budapest: Kossuth Kiadó.
- Rainer M. János (2003), *Ötvenhat után*, Budapest: 1956-os Intézet.
- Révész, Béla (2008), “„Out of Romania!” Reasons and Method in State Security Documents 1987-1989,” *Regio*, 11, 8-66.
- Ripp Zoltán (2006), *Rendszerváltás Magyarországon 1987-1990*, Budapest: Napvilág Kiadó.
- Tóth Imre (2009), “Variációk konfliktuskezelésre, Bonn, Berlin és Budapest diplomáciai erőfeszítései a keletnémet menekültkérdés megoldására, 1989,” *Külügyi Szemle*, 3, 159-185.
- Tókécs, Rudolf L. (1996), *Hungary's Negotiated Revolution: Economic Reform, Social Change and Political Succession, 1957-1990*, Cambridge: Cambridge University Press.

## The System Change in Hungary and International Situation

Akira OGINO

The aim of this paper is to examine the System Change in Hungary and its international background. Especially the author focused on how the Soviet policy towards Eastern Europe influenced domestic situation in Hungary and foreign policy during the System Change.

János Kádár, the General Secretary of the Hungarian Socialist Workers' Party (HSWP), hesitated to carry out a drastic reform in the face of economic crisis in the mid-1980s. Mikhail S. Gorbachev, the General Secretary of the Communist Party of the Soviet Union, thought that Kádár prevented Hungary from finding a way out of the difficulties. Gorbachev supported Károly Grósz, the Prime Minister, to grasp power in Hungary. Finally Kádár had to give up his position at the HSWP National Conference in May 1988. Grósz was elected the General Secretary of the HSWP. It was important for Gorbachev to find a moderate reform leader within the HSWP in order to export his perestroika to Eastern Europe.

When more than 11,000 Hungarian minorities in Romania flowed into Hungarian territory in the second half of 1980s, Hungarian-Romanian relations were deteriorating. It was important for Grósz to resolve the refugee problem. At first, Grósz expected Gorbachev's support to resolve the situation. Gorbachev didn't intervene in Hungarian-Romanian relations. Grósz agreed on summit meeting with Nicolae Ceaușescu, the Romanian President and the General Secretary of the Romanian Communist Party, in August 1988. But Grósz didn't succeed in improving the situation. As a result, Grósz's leadership within the HSWP became weak after the summit meeting.

Radical reformers within the HSWP gained power and Grósz lost his power in 1989. The Hungarian Government began to remove barbed-wire



stretched around the border of Austria in May, 1989. The barbed-wire with a high-tension current became a symbol of inhumane dictatorship after removing of restriction to go abroad in 1987. When more than 6,500 East Germans rushed to Hungarian territory in summer of 1989, East German communist leaders urged Hungary to repatriate them on the ground of the agreement of visa exemption between two states in 1969, which obligated to send illegal visitors and criminals home mutually. Miklós Németh, the Hungarian Prime Minister, and Gyula Horn, the Hungarian Minister of Foreign Affairs, refused to repatriate East Germans with intent to emigrate to West Germany by way of Austria, and made an decision on permitting to leave. Németh and Horn succeeded in gaining support from the West German Government and opened the border to let them go to Austria, September 11. Németh's decision on opening the border was the first step to independence from the Soviet Union.